

三重の登録有形文化財（後編）

県内の各地域には、独自の歴史があり、特有の文化・伝統が受け継がれています。そして、地域の景観を特徴付け、人々に愛される建造物も存在します。これらの中で、建築後50年を経過するなど、一定の条件を満たしたものが「登録有形文化財」となります。

今回も、前回に引き続き「登録有形文化財」をご紹介します。春の兆しに誘われて、訪ねてみてはいかがでしょうかでしょう。

*各登録有形文化財の開館日時・受け入れ方法・料金などはそれぞれに異なり、変更になる場合もありますので、必ず事前にご確認ください。

取材・文：中村真由美・中村元美
撮影：梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



四日市港繁栄の象徴ともいえる玄関棟外観

人と文化の交流拠点「伝七郎」として再始動

伊藤 伝七別邸

玄関棟・離れ座敷「さつき棟」〔四日市市高砂町〕

明治32（1899）年、四日市港が開港場（外国との通商を許された港）に指定されました。その7年後、港近くの画で開業したのが、料亭「浜松茂」です。以来、国際貿易港として発展する同港の歴史を見届けてきました。

風格漂う玄関棟と、後に増築した離れ座敷「さつき棟」が有形文化財に登録され、多くの経済人・文化人にも愛された料亭は、平成29（2017）年3月、その歴史に幕を降ろしました。しかし、同年12月に「伝七郎」として再始動を果たしたのです。現在、日本料理店運営のみならず、茶道体験などの文化教室、萬古焼の展覧会、講演会、ジャズなどの各種イベントが行われるなど、複合

的な役割を担います。

「私たちがめざすのは、国際文化交流拠点です。それは、第十世伊藤 伝七の志を受け継ぐことでもあるのです」と話すのは、藤本 修司さん。「伝七郎」の管理運営を担当する「株式会社日本伝統ビューロー」の社長でいらつしゃいます。お話の第十世伊藤 伝七（1852～

1924）とは、四日市出身の実業家で、日本最大の紡績会社・東洋紡績（現東洋紡）の創始者として知られます。政界でも活躍したほか、鉄道敷設の計画や、四郷村役場（現在の四郷郷土資料館）を建築して寄贈するなど、地域の発展にも多大な貢献を果たしました。実は料亭「浜松茂」（現「伝七郎」）は、伝七の別

邸として建てられたものだったのです。

「今後も、萬古焼などの伝統文化の情報を発信するほか、桑名市や津市など北中勢地域の文化観光施設と連携した観光ツアーなども計画しています」と藤本さん。伝七から受け継いだ志は、着実に実践されていくことでしょう。

お問い合わせ

「伝七郎」
TEL 059-327-7660



日本庭園を眺めながらの食事は格別



離れ座敷「さつき棟」

繊細な意匠がいくつも施される城下町の宿

薫楽荘

本館・蔵

【伊賀市上野桑町】



黒壁に瓦屋根、門の格子戸と全てに上品さがある

伊賀市の中心街、上野桑町にある「薫楽荘」は、明治期に建てられた木造2階建の旅館です。開業当時は「芳真楼」という茶屋でした。かつて周辺は花街と

す。同じ町にある製畳所が、「薫楽荘」の雰囲気に合わせて手掛けてくれました。2階に客間が5室ありますが、一つも同じ部屋はありません。床の間や欄間、天井など随所に凝った造作が見られ、使われる木もサルスベリや黒柿など、貴重なものもあります。また外国人が「侍になった気分だ」と喜んだのが、書を襖4枚に仕立てた部屋。この部屋を指定する人もいるほど、評判になっているようです。



大広間に藤の床柱



タイルが彩る通路



客間に廊下、館内全てに趣がある



宿泊者の交流の場にもなる談話室



庭園には香りを楽しむキンモクセイも

してにぎわい、通りには何軒か遊郭もありましたが、現在は、宿として営業するのは「薫楽荘」のみ。街路に面した重厚な土蔵や正面に巡らされた黒壁の塀が目を引き、往時を偲ばせてくれます。

入口門の両脇に設けられた飾り窓には、中をくりぬいた自然木の窓枠があらわれ、大工の技と遊び心を物語っています。黒壁の隅に構えるコンクリート製の防火水槽は、戦時中に置かれたものようです。門から入った通路と玄関の三和土には吸水性のある古風な陶器質タイルが埋め込まれ、庭石にも利用されています。洒落た装飾

階段を上がった場所に設けられた談話室は、東屋風の天井。居心地よく過ごせるようにと、照明など女将が工夫しています。また廊下の窓から見渡す裏庭では、稲荷社や不動尊を祀り、滝に見立てた石や灯籠を囲む木々が四季折々の豊かな表情を見せてくれます。「いい季節になると週末は観光目的で平日のビジネス利用にはリピーターの方が多いですね。最近では外国人観光客も増えてきました。こういった古い建物が好きなマニアックな人は連泊し

が、あちらこちらにさりげなく施されています。

使い込まれた黒光りする廊下を歩き、宿の主、中村元彦さんに通された大広間は、床柱に太い藤の木。どっしりと貫禄があり、床の間の置物も趣があります。「先々代が商売を始めましたが、昭和33(1958)年から旅館に。二代目のあと10年ほど旅館し、わたしたち夫婦が再開しました。消防法によりガラスサッシに変えなければいけないところもあったのですが、ほとんどが創業時のままです。湿度が高い日に戸は重くなるし、冬は寒くて大変ですが、この雰囲気求めてやってきてくれるお客さまに励まされています。建築構造など、わたしたちが知らないことも、教えてくれるんです」と中村さん。明治21(1888)年の建物をできる限りそのまま使っていきたいと、風通しをよくして手入れし、培ってきた格式を維持していこうと改装にも気を遣います。グレーの畳は、和紙を素材にしていま

て、近くの町並みも楽しんでくれています」と中村さん。夕食に伊賀牛を使ったメニューも用意しています。忍者の里の伊賀上野は、周囲を伊勢、近江、大和の山々に囲まれた歴史情緒あふれる城下町。館内には、伊賀忍者や上野天神祭のポスターを飾り、町歩きのパンフレットなどを取り揃え、訪れる人をもてなしています。

お問い合わせ

「薫楽荘」

TEL 05955-211-0027

「田中家資料館」として波瀬宿の姿を今に伝える

田中家住宅

主屋・前座敷「洗耳亭」など11件（松阪市飯高町）



高さ8.1メートルの石垣と前座敷「洗耳亭」

松坂城下から西へ進み、飯南町の粥見や飯高町の波瀬などを経て奈良県へ入り、和歌山城下へと至る道は和歌山街道と呼ばれます。街道沿いには今も趣ある場所が点在しますが、一番色濃く残っているのが波瀬でしょう。

「波瀬の宿場が栄えた江戸時代には、酒造業を営んでいました」と教えてくれるのは、脇本陣も務めていた田中家の17代目当主、田中善彦さん。松阪木材株式会社代表取締役会長でいらっしやいます。傍らでは奥様の洋子さんが領きます。お二人によると、水田の少ない山間の波瀬では酒米の確保はできないため、伊賀の名張で栽培した米を牛に背負わせて運び込んでいたといいます。

明治時代初めに酒造業から林業へと移行した同家では、同時代中頃から大正時代にかけて、前座敷「洗耳亭」・主屋・表納屋・表土塀・東蔵・東土塀・西土塀・南土塀・石垣・新蔵・西納屋が建てられました。平成30（2018）年に、11件



紅葉に彩られた前座敷「洗耳亭」と石垣※



表納屋「有徳笑館」内の展示風景



形も大きさも多種多様な火鉢が揃う



和歌山街道に面して建つ田中家住宅の主屋※



西納屋「有徳館」外観



西納屋「有徳館」内の展示風景

の建造物すべてが登録有形文化財となり、それを機に表納屋と西納屋を「田中家資料館」として公開することになったのです。

現在、同館の館長を務める洋子さんに内部を案内してもらおうと、主屋に對面して建つ表納屋「有徳笑館」では、同家で使われていた道具類が展示されています。林業には欠かせない、丸頭鋸

と呼ばれる大きなノコギリや、茶業も営んでいたことから、茶葉をふるいにかける竹製の道具などが所狭しと並びます。中でも目を引くのが大量の火鉢で、

さまざまな大きさのものが揃います。同地域の厳しい寒さと、部屋数だけでも30室以上という状況を表しているのです。

一方、西納屋「有徳館」では、先祖伝来の鎧兜や嫁入りの際の衣装や螺鈿の道具類などが並びます。その精巧な造りと艶やかさに、思わずため息が出ます。

ところで、両館を見学しているうちに展示物がガラスケース内に入っており、実際に手に取ることができません。あることに気付きました。これは「実際

に触れることで、当時の暮らしぶりや歴史・文化を身近に感じてもらいたい」との思いからだ伺いました。
なお、普段は保護のために非公開の建造物も、ご厚意で見せていただきました。堂々たる構えの主屋や、櫛田川の流れを眼下に見下ろす前座敷「洗耳亭」など、見るものすべてに驚かされませんが、中でも圧巻なのが、城郭のように積み上げられた石垣です。見上げていると、今にも鎧兜に身を包んだ武将が姿を現しそうです。

今後についてお二人に伺うと、土蔵の一部をギャラリーとしてイベントなどに開放する準備をしているほか、前座敷「洗耳亭」を茶会や句会で利用してもらうことなども検討中とのことでした。お二人の挑戦は、まだ始まったばかりだといえるでしょう。

お問い合わせ

「田中家資料館（木・日曜日開館 要予約）
*1・2月中は冬期休館中。
TEL 050-3592-0722

※印の写真は取材先から提供していただきました

「飯南局舎和み」として「再び町のシンボルに」



【松阪市飯南町】

【飯南局舎 和み】外観

平成元（1989）年、飯南郵便局の局舎がその役割を終えました。同局舎が建てられたのは、昭和7（1932）年のこと。白い洋風建築は、地域でもひととき目を引く存在で、シンボルとして親しまれてきたのです。

一時期、縫製工場として使用された後、長年放置されていた旧局舎を購入し、平成23（2011）年に「飯南局舎 和み」としてオープンさせたのが、垣本和美

の垣本さんに、館内を案内してもらうと、建具やガラスなど、当時の物をできるだけ再利用したという内装は、モダンであると同時に繊細で、職人たちの心意気が伝わります。

広々とした1階はギャラリーとして活用され、水彩画家の後藤勝美（1940〜2009）による松阪市内の美しい風景画が常設展示されています。

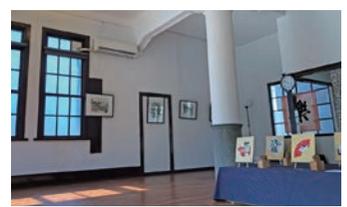
また、2階の和室では、垣本さんの

さん。同年には、登録有形文化財となり、「まちかど博物館」にも認定されました。旧局舎は、再び地域のシンボルとなったのです。

「ツタがからまって朽ちていく様子がとても寂しくて」と、購入当時の想いを語る館長の

手ほどきで、中国伝来の売茶本流の煎茶道を楽しむこともできると伺いました。煎茶を味わいながら、静かなひとときを過ごすのもおすすめです。

同館では、季節に応じた作品展などが行われますが、毎年3月（本年は13日・20日・21日・22日・27日）に開催されるのが「おもひでのひなまつり」です。地域の人が持ち寄った御殿雛や7段飾りのひな人形が勢揃いします。優美なひな人形たちに合いに行つてはいかががでしょう。



丸い柱が印象的な1階



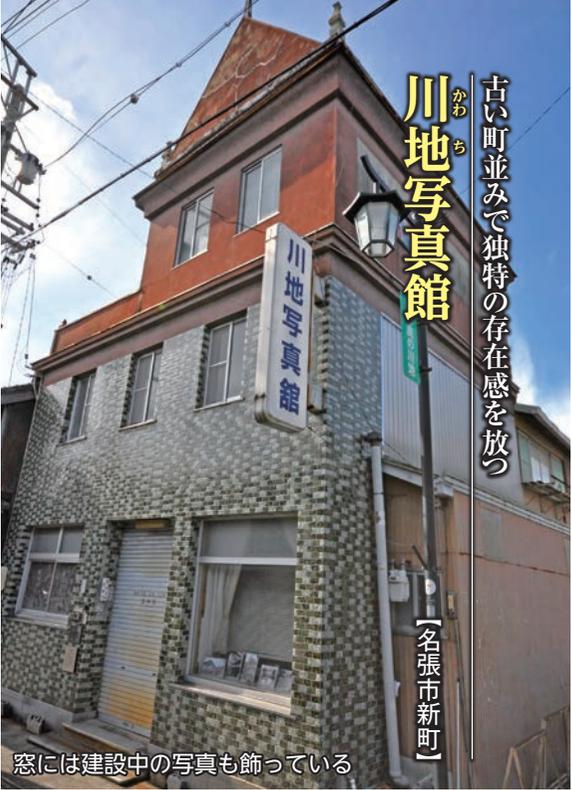
「おもひでのひなまつり」の展示風景※

お問い合わせ

「飯南局舎 和み」（毎週金曜日開館）
TEL 090-55004-6916

※印の写真は取材先から提供していただきました

古い町並みで独特の存在感を放つ



川地写真館

【名張市新町】

窓には建設中の写真も飾っている



裏から見える特徴的な屋根

です。昭和45（1970）年の改修で、1・2階の外壁をタイル貼りにしました。

創業は明治10

能者（現代の名工）にも選ばれました。スタジオを充実させ、最先端の技術に取り組む一方、明治期の名張の風景や人物、創成期のガラス写真を展示するスペースも。それらの写真は現在も鮮烈に蘇ります。また出張撮影に使われた木製の三脚と革製のバック、古いカメラも大切に保管しています。「二代目や三代目は馬に乗って美杉や曾爾まで撮影に行っていたようです。馬小屋もありました」と川地さん。カメラは湿板からガラス乾板、フィルム、そしてデジタルへと変遷しましたが、「写真は光なくして映りません。光で描く作品です」と時代を越えて共通する写真の力を語ります。



保管する貴重なガラス乾板

歴史的な建造物が多く残る初瀬街道から一本入った小道を歩くと、大正ロマンを感じる洋館が目飛び込んできます。屋根に三角形の妻壁を立ち上げ、パラペットの隅に小塔形の飾りを付けた3階建て。これは大正10（1921）年に建築された「川地写真館」です。当初の写場は2階にあり、屋根の一部がガラス張り。そこから入り込む太陽光をコントロールし、写真撮影に適した光を演出するスラントスタジオだったの

（1877）年、県下で現存する最古の写真館です。5代目を継いだ川地清広社長は、地元高校から大阪の日本写真専門学校に進み、19歳で卒業。その後、父親のかばん持ちをしながら撮影技術や経営学を学びました。商いをするには広い場所だと、桔梗が丘駅前にスタジオを移転。従来の型にはまった卒業アルバムを、革新的な技法で一大改革するなど、全国の写真館に変革をもたらし続け、2017年度の「卓越した技

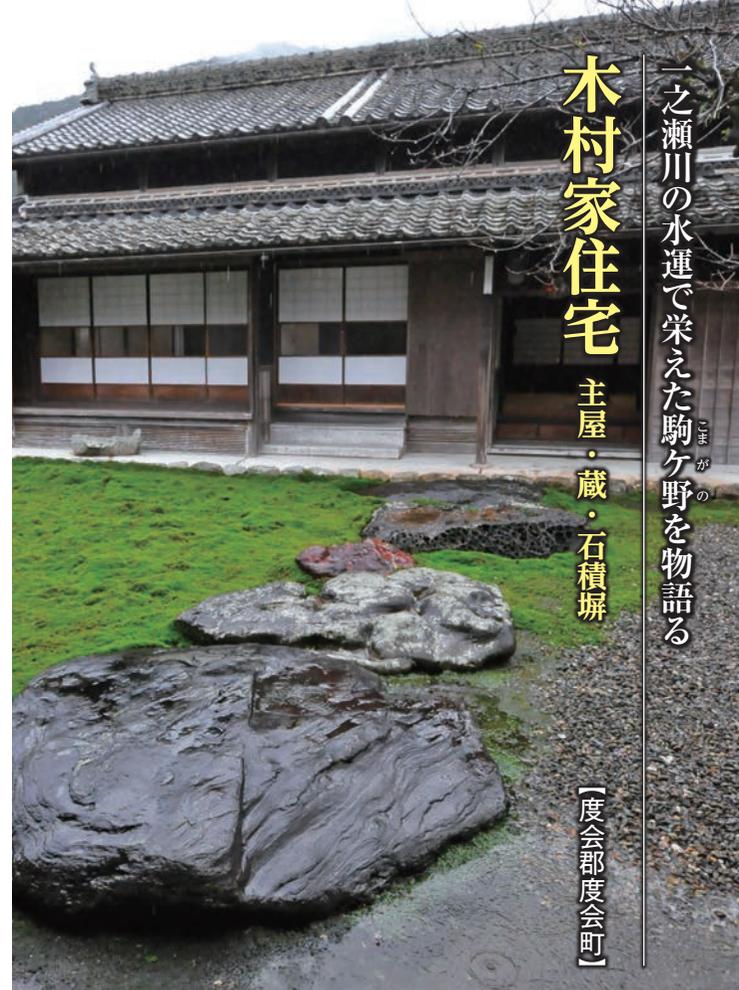
お問い合わせ

「川地写真館」
（フォトミュージアム写真の川地）
TEL 0595-65-1932

一之瀬川の水運で栄えた駒ヶ野を物語る

木村家住宅 主屋・蔵・石積塀

【度会郡度会町】



印象的な敷石。主屋の玄関横が駕籠寄せ

清流宮川と緑の山並みが豊かな度会町で、初めて国の「登録有形文化財」(建造物)の登録を受けたのが、駒ヶ野地区にある木村家住宅です。ここは江戸時代末期の紀州藩士である木村藤十郎の屋敷で、どっしりとした構えの長屋門をくぐれば、玄関までのアプローチに

置かれた自然石に風情が漂います。また敷地を囲う垣根も石を巧みに利用し、重厚な雰囲気。のどかな里で圧倒的な存在感を放つ建物です。

日本一の水質にも輝いた宮川は、古代から近代まで、物流をささえるインフラとして水運が発達し、まちの生活

往来が記され、立派な建物がその頃にぎわいを彷彿とさせてくれます。藤十郎の家は、幕末に紀州藩主の脱出経路の宿所として建て替えられたと考えられています。「安政の時代、紀州藩も江戸派と紀州派に分かれ、争いの絶えない時代がありました。藩主がそんな争いに巻き込まれそうになった時、紀州路を通じて脱出できるよう、中継点として駒ヶ野が選ばれたのでしよう」と木村さん。一之瀬川で下って伊勢大湊から船に乗り、三河そして江戸とルートは整っていました。

藩主を迎えることができるよう、主屋には駕籠寄せが設けられ、玄関を通らずにそのまま入れるようになっていきます。室内は段差を設けた上段の間は、当時では珍しい天井張り。そしていざというときに身を隠す裏座敷など、格式高いものとなっています。武家の屋敷構えを知るうえで、貴重な建物です。またその頃の建物はほとんどが板葺きですが、寺を除き、この辺りで一番の瓦屋根は木村家だったようです。明治になって御仕入方役所も廃止され、道路も改修されて車馬の交通が便利にな



台風被害を受け修理した長屋門



石積塀がぐると敷地を囲う



藩主を迎えるための気品ある客間



蔵には藤十郎が使った道具を保管する

をささえ、文化を育んできました。その支流である一之瀬川も大きな役割を担い、鵜飼い船の終点であった駒ヶ野は、薪炭や用材を舟積みする商人たちでにぎわい、南島方面(南伊勢町)からの魚荷も集められ、物流の拠点として栄えました。また、江戸時代、紀州藩は佐八(伊勢市)に御仕入方役所を置き、駒ヶ野はその枝役所となって、徴税や管理を行いました。山仕事に地域領民を雇い、そこで生産された物産の専売を行い、藩財政に役立てていました。この駒ヶ野役所に派遣されたのが木村藤十郎でした。藤十郎は文化7(1810)年生まれで、そろばん上手と評判だったようで、後に佐八役所の会計主任を務めるまでになりました。

「藩の財政が困窮してくると徴税のため各地の要所に役所が置かれ、幕末に若侍の藤十郎が赴任してきたようです」と、藤十郎の子孫である木村昭さん。現在も木村家住宅に暮らしています。保管する紀州藩の記録にも筏組や舟の

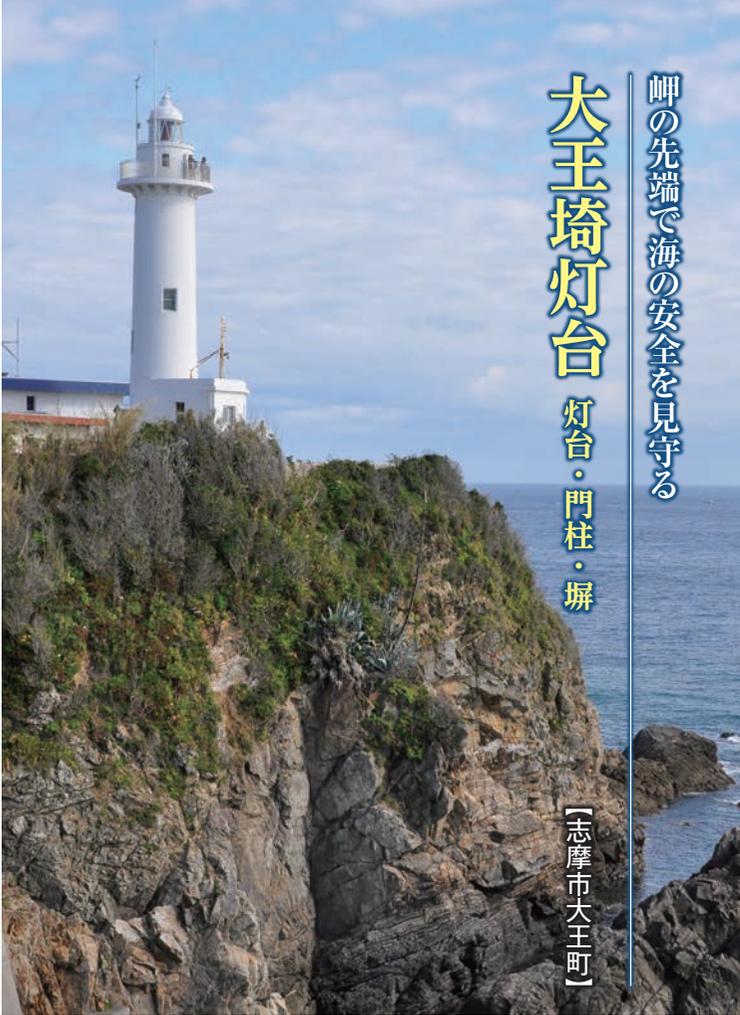
ると、舟運に頼るものは激減します。「藤十郎は次男だったので、土地の娘と結婚し養子になったようですが、木村姓を名乗っていました。退官の時には、太刀一振り、一代に限り源姓を名乗ることを許されています」と木村さん。文化財に登録されたことで、見学者も多いようです。訪れる人々に先祖の歴史を紐解き、駒ヶ野地区のことを案内しています。

お問い合わせ

度会町教育委員会事務局
TEL 0596-6212422

大王埼灯台 灯台・門柱・扉

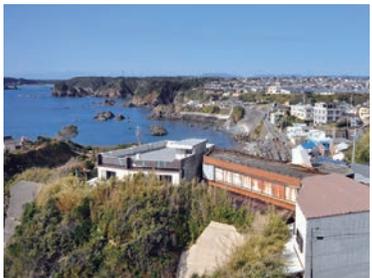
【志摩市大王町】



太平洋の荒波寄せる岸壁の先端に立つ



青空に映える白亜の灯台



眼下に広がる波切の町並み



パネルや模型を使って灯台を解説



建設時のレンズを間近に見られる



絵描きの銅像が佇む八幡さん公園

半年で完成、当時としては最先端の技術を駆使し、建てられました。地上から灯塔の頂部までの高さはおよそ20メートル。その姿は凛として美しく、白亜の灯台として知られています。大王埼灯台は赤と白の光が交互に出る「単閃白赤互光」で、30キロ先までその明かりを届け、海を見守っています。

灯台の隣には、日本財団と志摩市の協力により、平成22(2010)年、資料展示室が開設されました。模型や実物レンズなどにより、灯台を紹介しています。1階に展示された建設当時のレンズには、機銃掃射の痕跡が残され

ています。どこからでも目立つ存在の灯台は、戦時中の対象となったのでしよう。展示室2階は灯台の歴史や役割、その仕組みをわかりやすくパネルなどで紹介し、見応えのある内容です。また、麦埼灯台や御座埼灯台などを示した周辺の地図も案内し、海に面した志摩市に多く灯台が設置されていることがわかります。「灯台に登って三百六十度の景色を見るのもいいけど、離れて眺めるのも良いですよ。大王埼灯台なら八幡さん公園がおすすめです」と受付の女性が教えてくれました。

志摩市大王町は、灯台や石畳の坂道などの景色をモチーフに、多くの画家たちにも親しまれ「絵かきの町」として有名です。漁村の懐かしい集落の先に続く土産物屋の通りは郷愁をそそり、また須場の浜から歩けば、古い石段と石積みに石工の高い技術を目の当たりにします。小津安二郎監督の「浮草」や大庭秀雄監督の「君の名は」など、映画のロケ地となったことも知られています。

海岸段丘の景勝地に佇む志摩市の大王埼灯台。らせん階段を上った見張り台からは、地平線が弧を描き、爽快なパノラマの景色が広がっています。眼下には石坂が美しい波切の町、そしてリアス海岸の志摩半島、大海原の向こうに神島や渥美半島も見渡せます。

灯台の立つ高台は、城山と呼ばれ、戦国時代、九鬼一族が波切城を築いたところ。周辺は古くから沿岸航路の要衝であり、また遠州灘と熊野灘の境目にあたる海の難所として知られていました。海域には険礁、暗岩が散在し、「伊勢の神前、国崎の鎧、波切大王なけりやよい」と詠われ、難破する船は後を絶たなかったといわれます。大正2(1913)年、さんま漁船が遭難、死者51人が出る事故があり、また大正6(1917)年には、3000トンの巡洋艦「音羽」が大王岩で座礁。このような大きな海難がきっかけとなり、昭和2(1927)年、鉄筋コンクリート造りの灯台が完成しました。工事は5月に着工し、約

お問い合わせ

公益社団法人燈光会大王埼支所(大王埼灯台)
TEL 0599-72-1899